

5. 予算および主要課題

水産試験場

事業名	平成8年度予算
水産試験場運営費	38,372千円
試験研究調査費	32,393
(イサザ等特産種資源対策研究費)	(6,595)
(フナ・モロコ資源増大対策研究費)	(7,111)
(淡水真珠対策研究費)	(1,778)
(湖産アユ種苗性向上試験費)	(4,683)
(バイオテク応用技術開発研究費)	(2,000)
(新魚種の利用に関する研究費)	(2,947)
(増養殖技術研究費)	(4,167)
(漁況予報調査研究費)	(1,514)
(漁場環境調査研究費)	(1,598)
水産技術普及指導費	292
人件費	174,996
計	246,053

水産課計上分

事業名	平成8年度予算
栽培漁業総合推進対策費	
(シジミ増殖技術開発事業費)	(5,854)
漁場環境維持対策費	
(漁場環境保全技術開発総合試験費)	(4,000)
養殖漁業振興事業費	
(養殖水産動物保健対策推進事業費)	(4,000)
計	13,854千円

平成 8 年 度 主 要 研 究 課 題

事 業 名	調 査 研 究 課 題	調 査 研 究 内 容
1. イサザ等特産種資源対策研究 県 単 6, 595千円	1) イサザ再生産助長技術研究 2) ワカサギ・ヌマチチブ影響調査 3) ゲンゴロウブナ等固有種保全対策	イサザやゲンゴロウブナは琵琶湖特産種であり産業上重要な魚種であるが、近年、その漁獲量は激減の一途をたどっておりその対策が急がれている。そのため、その資源変動の要因を探るとともに早急に増殖手法について解明する調査研究を実施する。また、これら特産種と対照的にこれまでに琵琶湖にはほとんど生息しなかったワカサギやヌマチチブが増える傾向にあり、特産種への影響について調査する。
2. フナ・モロコ資源増大対策研究 県 単 7, 111千円	1) ホンモノコ再生産助長技術開発 2) ニゴロブナ放流効果の評価 3) 繁殖場造成技術開発 4) 遺伝的多様性の検討	ニゴロブナやホンモノコは琵琶湖漁業を支える重要な水産資源であるが、近年の産卵繁殖場の減少や、産卵繁殖場周辺での外来魚の食害等により漁獲量は減少しており、その傾向はニゴロブナで著しい。このため、平成4年より3年間はニゴロブナを中心に、平成7年はホンモノコについてそれぞれ資源動向の把握、より効果的な種苗放流法等の調査研究を進めてきた。本年度は最終年度として、これら両魚種の琵琶湖の環境条件に即した効果的な増殖方法を確立する調査研究を進める。
3. セタシジミ増殖技術開発研究 国 費 5, 800千円	1) 種苗量産技術開発 2) 放流技術開発 3) 資源管理調査	セタシジミは琵琶湖の特産種として、消費者ニーズは高いが近年漁獲量は激減している。そこでセタシジミの資源培養に努め、シジミ漁業の振興を図るために種苗を人工的に大量生産する技術と、有効な放流手法の確立をめざす。
4. 淡水真珠対策研究 県 単 1, 778千円	1) 真珠養殖試験 2) 優良母貝作出技術開発 3) 真珠漁場環境調査	真珠母貝（イケケウガイ）は、漁場環境の変化等によりその成長や生存率が急激に低下し、これに伴い真珠生産量も減少している。このため現状の漁場環境に合った真珠母貝の改良等を行い、真珠養殖技術の確立に向けての調査研究を進める。
5. 湖産アユ種苗性向上試験 県 単 4, 683千円	1) 湖産アユの健康状況調査 2) 種苗の疾病状況調査と対策試験	琵琶湖のコアユは県内のみならず全国内水面漁業にとっても最も重要な魚種であるため、採捕時の健苗性、種苗仕立て時の魚病対策を中心に種苗品質の向上に向けて技術開発を推進する。
6. 新魚種の利用に関する研究 県 単 2, 947千円	1) ワカサギの利用研究 2) ヌマチチブの利用研究 3) 各種樹の飼育し試験	ワカサギやヌマチチブなどの新しい移入魚は現在のところ未利用のまま放置されている。このため、これら魚種の資源的有効利用と特産種保護の観点から、その利用加工の調査研究を進める。